寒山句集

秋

きらのぶん

蔭涼虚白家集

秋ノ部

初秋

手紙ふ人ゝ封や之紅の秋
篇 人の ゝ之まりや ゝ之の秋
さゝとあゝ白ゝ牧市 ゝ之の秋
之川秋やあゝ之 ゝ杉ゝ

初秋乃かくれもなし生身魂

須磨の後はなけりゝ其跡の秋

初嵐

笛ふくも情ありけりやまかつし

ふきかへの稲毛こえて初あらし

七夕

ねぶたさや伯母なかし床の山

鬼灯のわりきお白や女七夕

子ともらにまつさきて捧るや星手向

あふせまで星のあふせをちきりの夜

わすれぬることへくるまて天乃川

星合やまたくもあま竹まくら

星の恋喰しくもあふ瀬なる

天乃川仰向ひさふりたる

深井の底にうつれるあまの川

翫ぬれや出るあかつきのす

氣しある蝶のいさゝりて乃川
はそきらふのまる〃かなやまの川

盆の月　魂まつり

照中に紅のあるや盆の月
なかくみや生きてゐる月の代
まかぬや餓鬼の手をとる擢
さよものきなるゝかゆりしる

梅竹　蝶几

ちるとの脚をよけり　蝶子ころ
梅竹乃宮をる姫女うろすり
神ゝぬめのけく田るやちるとに香
言めのすらに経や　きるものか
御あり　世み侍錦や言　竹几

蓮飯

生のもとそきなしや蓮の飯
是飯にようえくちとのすむ梅竹

[illegible]

踊

[illegible]

稽妻

[illegible]

[illegible]

稽妻の出這入濃し宵の月

[illegible]

稽妻の[illegible]

宵

[illegible]

[illegible]の昌きて[illegible]

[illegible]

[illegible]

嶺しらくもの[illegible]

[illegible]

きくもかなしき月[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

二見

[illegible]

一葉

相[illegible]

[illegible]

散柳

木槿

[illegible]

[illegible]

[illegible]

萩

[illegible]

[illegible]

[illegible]や 掃除[illegible]萩 [illegible]を

[illegible]

[illegible]

[illegible]

悼 [illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

虫

[illegible]

[illegible]

きりぎすの聲をとらへて侍るべき

秋歌

皆人々とかれぬる林の竹の弱り

さらぬ人の夢ぬる蟬の羽衣

情ある人の為にぞ

蟬竹

やもすれば宿をとりて居る蟬の

情竹をあはれとぞ思ふ

うんかの羽をとりて紙

ふるへふるへる翅の強 赤とんぼ

首ひねる貝をとりて解る 蟬竹

情竹をさうの中にぞ

ひとりぼつちの蛍とんぼ

情竹のまやとんぼの羽

月

四月五日六日七日八日九日

つゝ出て月のかゝる人待おと
待やすらふ程のあるゆゝしさ
まつもひやうらの浦まつ川
名月や神うの森の松ごしに
名月のこゝろ行むかし東山
うゝ〳〵と悔明まてふの月
やう月のとゝ〳〵ゝ雁の
名月を待て待て待て待て

もゝとせも出てなまるゝふの月
待てあるゝ松を待てゝふの月
松を出るゝ月もゝゝふの月
待人の来ぬふゝりゝふの月
信ゝのあけゝゝゝふの月
上客のゝ待ひゝゝ月おゝ
ゝゝゝおまゝまゝや月のゝ
松ゝゝゝ月のゝ

[illegible]

[illegible]

上へ[illegible]名月や　池[illegible]面

[illegible]へ行[illegible]の　月[illegible]雨

雨[illegible]月[illegible]峯の[illegible]ハ[illegible]

[illegible]や　雨の月

[illegible]や　[illegible]よ　[illegible]

[illegible]ひ　[illegible]の月

[illegible]

十[illegible]

[illegible]ひの[illegible]月[illegible]

人[illegible]おくや[illegible]の月[illegible]

月[illegible]

[illegible]ひ[illegible]少[illegible]

[illegible]の[illegible]ハ

[illegible]丈[illegible]月

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋雨

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

稲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鳴子　業山子　おとめ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

絲根も あらはれて ぬけし水
とうろふ 絲の きゝて ぬけにけり

秋乃季寄

露の手斗さ 人あつめ なかなかなる
白露の白眼さまそや たてかしとり
りゝきゝやゝやつゝり 音の鵙
きゝゝりり 絲の 羽さきの 羽さき
秋手からゝ 了書ひまて あらふなり

うゝかゝのやゝゝつさ ほにのりて 雨ず
まつ虫をしゝるや ゐの りゐる
連に味しゝや ゐ あまりわゝる
追にゝに 秋手にゝゝて ゐゐる
了來 にゝにゝ 茶手ゝ ゝゝ手

蚯蚓鳴

秋日和 ゝけ音切なく 坂[illegible]
秋まゝや 聲ひゝゝゝゝ ゝゝす

鶉

河鹿

鹿

碓

森入

菊

咲そめし名のちらぬうちにこそ
つかうまつれ柳なるべし
咲そめて織手入わ　そこの生
つゝこの毎日出まく菊はそ
言のまやおもいのおれ指つゝ
紫いと紫やこゝろ西の菊
指指結のてゝわ言あるらゝ

きゝきゝの後のうとゝ結わ　笠ひゝる
羽織帯をあそこわきゝかをを
和歌言わおゝて乃ゝ結ゝ紫
人ゝゝゝ　妹のあを菊　あゝ
山ゝをやいゝ例ゝるの素
きゝ笠ゝゝかのきゝ結わ　指俳
結まんゝ日ゝ　殺生わきゝの
指んゝ咲ゝあゝ素言の指俳

菊いろく中から村雨残ての
しらぬ又ふりあるきくの十日哉
咲みだれし黄菊ともうるしき名

よき傍の家にて

人なしとて名利しらぬ庵の菊
世の中にも吉菊なるへし月の兄
菊の節わりの兄杖をられかん

前後山公のもとへ重陽の日まうで
此本の宿らん節しお待りけるに

あつて紅菊とのくおく此の年

南部ともうまし二の中菊にまつの絹をさ
技を州名にしてもめへかまる乃奈日
又ぞしる人で後のけりてなけるま
名あそ

ちる菊や法しる節も家流くとの

芦の花　新蕎麦　栗

あきるなし稿くきなくてけアの花
新そんと菊をうちたり秋時候
咲けしと風そいのとや新稲ひ

[illegible]

草

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

木の子

[illegible]

紅葉

[illegible]

[illegible]

ちるまでも紅葉かな　妙ちらら
こゝろしてよ紅葉今やゆふつ乃鳥
おのまゝ秋しる白や　松紅葉
貞人之も流手之　壁の紅葉もちら
つらもりも流手にさらし秋紅葉の香
木の手乃手に込り梢もちち
きらゝ紅葉より梢ちゝら
岳大梢まゝ手しく

ふるきて紅葉て緑まつ淡き紅葉
お山の梢かな
春のや紅葉乃京なみ人の道山守
浅紅頃藻色の葉小白きを
ねの藤その外にこふ梢もみち
萌藻
緑多秋く秋くさまゝり紅藻
さ今日の小家さゝや出羽やま

新米　新酒

家毎をまつ新米そなへけり
多賀の浦やふるゝ　さかり米
かゝ舟のたゝるたなる新酒うる
焼米のうひやゝ紅葉　手えうる

后の月

ひらけぬ月　さかりなく人のゝり
又ふたゝび　さらもすなう後の月

ひとまつもうて　せきやゝ後の月
俳諧　ふるゝ山　さらやゝ　ひらの　つき
世ぬけ人の　まを　沒ぬや　后の月
減ら　ひらけ　ふるや　ひらけ　月

秋の菓子

さうしゝ　柘榴　ひらけて　ふるふる
くらけゝ　柘榴や　鬼ひ　ぬ　ゝ
うまゝ　ひらけ　芋菓子　ふるゝ

荒てゆく なりぬ 家の 老くゆく

実のりぬる あまちる 葉や くれのとき、

鳥かと小僧のよしや 柿 くだけ

緑をゆり 枝のしてゐまや ありの実

露時雨

此宿の何もかへてしばしかに

請わり出し 神々しうめへ 時雨

ゆく松のかゝりしたれ つゆしくれ

此年限しく

身錆の御さめ行く気をしれ

混題

我は鳥なみのもの後来て寄る

なみ行りうつる筆て結さけく

我家や あなしきなくく 涼しき字

鬼灯の黒錆や 美女の口中

なくさくとく 夜さけれぬ 出雲 其行

てふの住をもとせて若芽萌ゆる芳
東いのち味ふさかり夜かくし
梅か香に清くなりあをば葉と緑
女郎花そよけハ戦く尾花の香
柳らん〱日覚す二百十日の風
火色中ふ涼しくあかりやいと花
秋の螢おちんとしてまうあかり
紙様子志の書物なり秋の燈

惆然よくおもえなり滴時雨
蛼の音絶やうなんと露しく〱
擬然耳くなりまさ悲しくなり
とりわけ秋のつきや身ふたつ
名残まつりおかれをしるやあはれの葉
風ふく夏のかたとりや里の柿
おもかけ明くなりぬ秋の山
切枝を縛ちくへなり峯の松

雲水の世をへてきゝて秋のかり

[illegible]

秋汝のこゝひりあらつや松の緒

秋納の常く簇もいとくすおのく
こち侘ひさる老郷の神ぶ烏んと
急萱の一株魚来なりさると怪ひ
まつく

すゝきや耳をそはたつ月の有明の菴

仲秋名月は伊勢にまいる

旅中のくさく

世にふりや錦繍にいる秋の色

[illegible]

さよの種やくさのはなことくさ

長月中の二日東都を旅立て同日
山中の渡大岩乃ひと渡住偶此
閑窓庵呼継の松下まくらに寝ぬ
こゝろあの情も熱りて猛く為て
ころに行することのありけれ

寺のなかきくや紅葉の新根

春海庵

蛛のいと冨士よりかゝるものもなし

清日脚より穂かくれを見るをあらめ
ころもしたゝりぬ

唐紙をみなる舟あり あさ日より

三上山眺望

見わたしてる葉の中ーや三上やま

粟津晴嵐

志らなみの雲も大津や塚のあ

津勢山秋保

志つ子 尖柳之 妹粋 好風
風雅 白蓮の枝支わの穂情を
なさるんとそか乃新葉主とり
款し鄕ゝて含ひしみ社そ いかまし
は情に入りけり
和五子与我は往の字に子まくとおもしろし
因村らくしまて いつは穂乃鼻常
すくの定ませ東なとなめ数のはなれ
それ

送り人乃わくの言葉しるや あさ日和

登山寺

草の花かなやかきさくる 百里翁